

理学療法士養成短期大学における学生の学習動機づけとその支援方法についての1考察

～職業的アイデンティティの視点から～

A STUDY ON LEARNIG MOTIVATION AND FACILITATING LEARNING ACTIVITIES IN THE THREE-YEAR SYSTEM JUNIOR COLLEGE OF THE PHYSICAL THERAPIST TRAINING SCHOOL

～ THE RELATIONS WITH THE VOCATIONAL IDENTITY AND LEARNIG MOTIVATION ～

大橋 孝子

Takako OOHASHI

キーワード：理学療法士養成短期大学、学習動機づけ、職業的アイデンティティ、学習動機づけの支援方法
Key words : physiotherapist Training Junior College, learnig motivation, professional identity, facilitating learning activities

要 旨

- 〔目的〕本研究は、理学療法士養成短期大学における学生の学習動機づけを高める支援方法を探るために、学生の学習動機づけと職業的アイデンティティとの関連性について明らかにする事である。
- 〔方法〕理学療法士養成短期大学に在籍している1～3年生229人を対象に、学習動機づけと職業的アイデンティティに関する質問紙調査を実施した。この質問紙とは別に3年生には、入学時から調査時点までの学習動機づけの変化を折れ線グラフで現わす調査を同時に行った。調査の結果を、単回帰分析にて分析した。
- 〔結果〕学習動機づけと職業的アイデンティティには、正の相関が認められた。また、職業的アイデンティティの形成度合いの高い学生においては、必ずしも学習動機づけは高くない事が明らかになった。
- 〔考察〕本研究の結果から、1年生や2年生においては、職業的アイデンティティの第4因子である「社会的貢献への志向」を高めることができれば、学習動機づけ下位尺度の「同一化的調整」や「内発的動機づけ」が高まることができる事が示された。3年生においては、職業的アイデンティティの第1因子である「理学療法士選択の自信」を高めることができれば、学習動機づけ下位尺度の「同一化的調整」や「内発的動機づけ」が高まることができる事が示された。
- 〔結論〕理学療法士養成短期大学における学生の学習動機づけを高める支援方法の一つとして、学生の職業的アイデンティティを高めるような手段は、有効であると考えられる。

Abstract

[Purpose] The purpose of this study is to clarify the relationship between student motivation and professional identity in order to find a support method to increase student motivation in physical therapist training junior college.

[Method] A questionnaire survey on learning motivation and professional identity was conducted for 229 1st to 3rd graders enrolled in physiotherapist training junior college. In addition to this questionnaire survey, third-year students were simultaneously surveyed to show the change in learning motivation from the time of admission to the time of the survey in a line graph. The results of the survey were analyzed by single regression analysis.

[Results] A positive correlation was found between learning motivation and professional identity. It was also found that students with a high degree of professional identity are not necessarily motivated to learn.

[Discussion] From the results of this study, in the 1st and 2nd grades, if the fourth factor of professional identity, “intention to social contribution,” can be increased, the subordinate scale of learning motivation “identification adjustment” and “internal motivation” can be increased. In 3rd grade, if the first factor of professional identity, “confidence in physiotherapist selection,” can be increased, “identification adjustment” and “internal motivation” of the learning motivation subscale can be increased.

[Conclusion] As one of the support methods to enhance students’ motivation for learning at the physiotherapist training junior college, measures to increase the professional identity of students are considered effective.

1. はじめに

本研究の目的は、理学療法士養成短期大学における学習動機づけに関する支援方法について、職業的アイデンティティの視点から明らかにすることである。仮説は、「職業的アイデンティティの形成の度合いの低い学生は学習動機づけが低く、職業的アイデンティティの形成の度合いの高い学生は学習動機づけが高い。しかし、学習動機づけが高い学生は必ずしも職業的アイデンティティの形成の度合いが高いとは言えない」である。

著者の勤務している短期大学は、理学療法士の養成短期大学である。ここ数年の学生の様子から、「理学療法士になりたい」という明白な目的を持って入学しているにも関わらず、言われたことは行いがそれ以上はやらない、興味がないわけではないが疑問に感じて自ら調べるという行動を起こ

さない、というようなやる気を感じられない学生が多くなってきているように感じている。やる気のなさを感じる学生は何が原因で「やる気」が出ないのであろうか。「やる気のなさ」の「やる気」とは、学習に対する「意欲」であり「学習動機づけ」の事である。この学習動機づけの要因を明らかにすることができれば、やる気のない学生や学習動機づけの低い学生の学習動機づけを高める事ができる支援方法が明らかになるのではないかと考えたのが本研究のきっかけである。

本研究の背景を、以下に示す。日本における大学や短期大学への進学率は、平成27年度に50%を超えた。アメリカの高等教育研究者のMトロウは、同年齢人口の高等教育への進学率が15%までを「エリート段階」、15%を超え50%までを「マス段階」、50%を超えた段階を「ユニバーサル段階」と定義づけている¹⁾。現在の日本は、高等教

育への進学率が50%を超えユニバーサル段階に突入したと言える。多くの学生が高等教育を希望し進学することは良い事であるが、その反面、大学生の学力低下が問題視されている。2013年のベネッセ教育総合研究所が実施した「高大接続に関する調査」において、学生の学力低下を問題視する大学が7割以上に達することがわかった²⁾。この調査によると、「授業を通して学生の学力低下が問題になっている」と回答した大学は、全体の75.8%であった。「学生間の学力差が大きく、授業がしづらいことが問題になっている」と回答した大学は、全体の67.8%であった。

本来大学や短期大学は、学生自身が自己選択し自己実現に向けて入学する高等教育機関である。自ら選択し入学するのであるから、自ら学習に向向きに取り組む準備があり、能動的学習者になり易いのではないかと想像する。最近の大学や短期大学の学生について考えてみると、能動的に学習している学生も多くいるが、その反面、教員に言われてようやく学習を始める学生も多くいるのではないか。しかし、学習を始めるきっかけが教員の一言であったとしても、その学習に興味がわいてくると、学生は能動的学習者になっていく。

理学療法士養成大学の学生の学習動機づけが高まる要因の一つに、職業的アイデンティティ（学生個人の職業的イメージ）があるのではないかと考えられる。もし、学生が自分なりの職業的アイデンティティを形成していれば、自分が行うべき目標が明白になる。目標が明白になると具体的な行うべき行動が明らかになり目標に向かっていく意欲がでる。つまり、理学療法士に対する職業的アイデンティティが形成され理学療法士になりたい気持ちが高まる事により学習動機づけが高まるのではないかと考えられるのである。

2. 先行研究について

成田亜希の研究によると、「大学への進路自己決定度は学習動機づけにも学業成績にも影響せず、進学動機に関しては、学習動機づけや学業成績に影響を与える」ことがわかったと報告している³⁾。

成田の研究では、大学への進学動機が学習動機づけに影響を与えていると結論づけているが、入学後の学習動機づけの要因について明らかにされていない。落合幸子らの研究によると、「大学入学時の進路決定プロセスが入学後に大きな影響を及ぼしている」と報告している。落合らは、「早期に職業を決定している学生は職業的アイデンティティが明確であるが、そうではない学生は不明確であるので学生の職業的アイデンティティの形成に対して大学における教育効果を明らかにする研究が必要である」と、述べている⁴⁾。本研究において、学習動機づけと職業的アイデンティティとの関連性を明らかにすることができれば、理学療法士養成大学における教育効果のある支援方法を探ることができるのではないかと考えている。

尾崎仁美らは、「京都府内の大学における、心理学関係の授業を受講している学生に対しての授業意欲の変化とその要因についての研究」で、入学時から2年生にかけての授業意欲と学業意欲の変化について折れ線グラフを作成するという調査を実施しその結果について報告している⁵⁾。尾崎によると、「意欲の低下は、1年生前期と2年生前期に多く、意欲の低下の理由は、授業に対する期待とのギャップ、科目に対する興味の喪失、授業についていけなさ、生活習慣の崩れ、学業以外の活動重視などが理由にあげられている」と、述べている。また、「意欲の上昇は、2年生後期から3年前期が多く、意欲の上昇する理由は、授業内容や進路に関するものであった」としている。さらに、「1年生前期の授業において学生の意欲を喚起する事が重要である」と結論づけている。この報告の内容を理学療法士養成短期大学に在籍している学生に当てはめて考えてみると、1年生前期で専門科目の多さと授業内容の専門性から意欲の低下が起こり、2年生前期でより専門性の高い授業が始まり授業についていけなさを感じて意欲の低下が起こるのではないかと考えられる。意欲の上昇が3年生の前期で高まることは、2年生の後期における評価実習で理想とする理学療法士と出会い3年生の臨床実習に意欲的に向かおうと

する気持ちが高まるのではないかと考えられる。

理学療法士養成短期大学における1年生の学習意欲の低下や3年生の学習意欲の上昇には、学生の理想とする理学療法士像が明確かどうかという事と関係していると考えられ、それは、学生の理学療法士に対する職業的アイデンティティの形成に関連してくると考えられるのである。

3. 学習動機づけとは？

櫻井茂男によると学習意欲は、「自ら学ぶ意欲と他律的な学習意欲に分けることができる」としている⁶⁾。櫻井は、学習意欲とは心理学における「動機」や「学習動機」とほぼ同義語としており、本研究における「学習動機づけ」も「学習意欲」とほぼ同義語であると言える。櫻井は、「自ら学ぶ意欲とは、内発的な学習意欲であり、自己実現のための学習意欲である」としている。「他律的な学習意欲とは、他者からの指示によって仕方なく学ぼうとする意欲であり、外発的な学習意欲」としている。能動的な学習者になるためには、自ら学ぶ意欲、つまり、内発的な学習意欲を高めることが重要なのである。

市川伸一は、動機づけについて次のように説明している⁷⁾。「動機づけには2つの意味合いがあり、一つは「やる気」「意欲」の事で、もう1つは基本的な欲求（心の中にある欲求）のようなものである」としている。また、市川は学習動機づけの2要因モデルを明らかにしている。自分が行おうとする学習の内容が楽しいとか充実しているという次元と、その学習が自分の生活や仕事にどれだけ役に立つかという次元を組み合わせ、学習の動機づけを6つに分類している。実用志向、報酬志向、訓練志向、自尊志向、充実志向、関係志向、の6つである。2要因モデルは、自らの意思で学習に取り組もうとする内発的動機づけと自己の外界からの何らかの働きかけによる外発的動機づけの大きさによる組み合わせであると説明している。この考え方によると、学習の内容が楽しく学習の内容が自分の生活や将来の仕事に生かせることが多いと判断でできた場合に最大の学習動

機づけとなると言えるのではないかと考えられる。

J.M.ケラーのARCSモデルは、学習動機づけの考え方に大きな影響をもたらしている。ARCSモデルは、学習動機づけについて、その過程について明解に説明していると考えられており、学習意欲に関する概念を4つに分類している⁸⁾。具体的には、Attention（注意）Relevance（関連性）Confidence（自信）Satisfaction（満足感）の4つである。学習者の視点でこのモデルの考え方を説明すると、学習者が学習内容に注目し学習内容が自分の目標としている仕事と関連性が高いと理解し自分の学習の方法で成果が出せると自信を持った結果、満足感を感じることができるという事になる。指導者の視点でこのモデルの考え方を説明すると、学習者の注意を引くような学習デザインを考え、学習者が目標としている仕事と関連性がある事を理解させ目標達成のための学習方法を導き学習者の自信を高め最後に報酬を与えることで満足感を味合わすことができるということになる。このことから、学習動機づけは、学習者の要因だけではなく学習デザインを考える側の要因の相互作用によるのではないかと、ARCSモデルは問いかけているように感ずるのである。J.M.ケラーによると、「学習意欲が低いレベルであると学習成果も低いレベルであるが、学習意欲が高いレベルになると学習成果も高いレベルになるとしているが、学習意欲が高まりすぎると学習成果は悪化する」とも述べている⁸⁾。最適な学習意欲の状態を保ち続けることが、学習成果を高いレベルに保つことになるという事である。この点は、興味を引くところである。

半澤礼之は、「入学後の学業リアリティショックは、学業意欲低下・授業意欲低下や学業に対する疎外感情（学業的自己疎外感）と関連している」と報告している⁹⁾。学業リアリティショックとは、「入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた否定的な違和感」と定義している。理学療法士養成大学や養成短期大学の場合には入学後リアリティショック

があるが、それでもなりたいたいという強い気持ちがあるが、学業リアリティショックを乗り越えさせているのであろう。

学習動機づけについて具体的な説明を示してはいないが、稲垣恭子は「日本の教育現場には、勤勉さ＝努力主義という文化があったが、最近では努力が減退しているだけではなく、頑張る方向も違ってきており、学校の中から努力や勤勉価値を維持する文化が後退しつつある」と指摘している¹⁾。このような教育文化の変化があるという背景は、学習動機づけが低くなる要因の1つではないかと考えられる。

4. 職業的アイデンティティとは？

一般的にアイデンティティとは、「自分はいたい何者か」という問いに対する答えであり、「自分」を定義するものということになる。エリクソンは、「アイデンティティ青年と危機」の中で、「私とは勤労を学ぶ者のことである。かつて習得した役割や技能とその時代の理想像をいかに結びつけるかという問題である。(中略) 職業の選択は給料と地位という問題を越えて重要性を帯びてくる。青年の心を最も強く動揺させるものは、職業的アイデンティティが安住する事ができないという無力感である」と、述べている¹⁰⁾。アイデンティティと職業的アイデンティティは非常に関連性が強いと言える。

本研究における職業的アイデンティティとは、「こんな仕事というイメージ」あるいは「自分なりの職業観」のことである。藤井恭子は、職業的アイデンティティについて「アイデンティティの感覚であり、職業的アイデンティティを実際にどのように感じているのかという現象である」と述べている¹¹⁾。本研究における「自分なりの職業観」は、理学療法士という職業を学生個人がどう感じているのかという事である。藤井の述べている「職業的アイデンティティ」と同様であると言える。職業的アイデンティティとは、事実ではなく学生個人の感覚なのである。

次に、理学療法士の職業的アイデンティティ形

成の特徴について述べる。理学療法士の根拠となる法律は、「理学療法士および作業療法士法」である。国家試験に合格し厚生労働大臣の免許を受けた者が「理学療法士」と名乗ることができるという、名称独占であることを規定している。しかし、この法律で「理学療法は、理学療法士以外に行ってはならない」という規定はない。理学療法士は名称独占であり業務独占ではないことが理解できる。

次に、他の医療職の職業的アイデンティティの形成の特徴を述べる。理学療法士と混同されやすい職業であるマッサージ師や柔道整復師には開業権があり、施術所を開業することができる。さらに、マッサージ師や柔道整復師の業務が法律で規定されており、マッサージ師や柔道整復師の業務は、マッサージ師や柔道整復師しか行えない。そのため、マッサージ師や柔道整復師の職業的アイデンティティは、形成されやすいと言える。医師や看護師はどうだろうか。医師や看護師は、名称独占であり業務独占である。医師の業務は医師のみ行うことができ、看護師の業務は看護師のみが行える。これは法律で規定されている。そのため、医師や看護師の職業的アイデンティティは形成されやすいと言える。これらの職種と比較すると、理学療法士の職業的アイデンティティは構築しにくいと言えるのではないか。

藤井恭子は、医療系学生における職業的アイデンティティの因子を4つ見だし、医療系大学の学科別にこの因子の得点とモデルの有無による影響を検討したところ、看護学科、理学療法学科、作業療法学科、放射線技術学科で異なる特徴が得られたと報告している¹²⁾。「職業的アイデンティティ形成に職業で差が生じる理由は3点あり、1. 仕事の内容の明確さ、2. 職業の社会的地位、3. 理想的モデルの有無である」と報告している。理学療法士は、仕事の内容が明確でなく、社会的地位は日本においてはそれほど高いとは言えない。また、社会に広く知られているとも言えない。このような理由で、職業的アイデンティティが形成しにくいのかもかもしれない。

5. 本研究の対象と方法

本研究の方法は、学習動機づけに関する質問紙と職業的アイデンティティに関する質問紙による質問紙調査とそれに加えて3年生に対しては入学してから調査時点までの学習動機づけの変化を折れ線グラフで表すという、質問紙による調査研究である。本研究の調査の対象は、理学療法士養成短期大学に在籍している1年生、2年生、3年生計229名であった。調査の時期は、入学後また進級後の7月に調査を行った。調査を実施する7月は、1年生は前期の授業が終了しているが臨床実習に行っていない時期であり、2年生は、見学実習後約6か月経過している時期であり、3年生は、見学実習、評価実習、そして総合実習を1回終了した直後であった。調査結果の統計学的解析は、単回帰分析にて行い、相関の強さを比較するために Pearson の積率相関係数を使用して解析をおこなった。

本研究は、放送大学研究倫理審査委員会（通知番号54）および仙台青葉学院短期大学研究倫理審査委員会（承認番号3001）の承認を受け実施した。

学習動機づけに関する質問紙は、成田亜希が、「進路自己決定度や進学動機が学習動機づけと学業成績に与える影響—理学療法士養成課程学生を

表1 学習動機づけに関する質問紙

学習動機づけに関する質問紙					
あなたに該当する項目に丸をつけてください。	男	女			
	1年生	2年生	3年生		
質問 あなたはどのような理由で日々勉強をしていますか？次にあげられる理由について、あてはまるものに○をつけてください					
	全然あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	すこしあてはまる	非常にあてはまる
①先生が課題を出すから。	1	2	3	4	5
②勉強しないと不安だから。	1	2	3	4	5
③勉強しておくべき大切な内容だから。	1	2	3	4	5
④問題を解くことがおもしろいから。	1	2	3	4	5
⑤勉強しないと親がうるさいから。	1	2	3	4	5
⑥勉強しないと自分が恥ずかしいから。	1	2	3	4	5
⑦理学療法について知りたいから	1	2	3	4	5
⑧わかるようになるのが嬉しいから。	1	2	3	4	5
⑨勉強するのが決まりだから。	1	2	3	4	5
⑩今勉強しておかないと後で困るから。	1	2	3	4	5
⑪勉強内容が毎日の生活で必要なことだから。	1	2	3	4	5
⑫難しいことをやってみること楽しいから。	1	2	3	4	5
⑬勉強しないといけない社会だから。	1	2	3	4	5
⑭教員に良い学生だと思ってほしいから。	1	2	3	4	5
⑮知識を得ることで幸せになれるから。	1	2	3	4	5
⑯できるようになることが楽しいから。	1	2	3	4	5
⑰勉強しておけば教員に怒られずにすむから。	1	2	3	4	5
⑱不勉強で親を悲しませたくないから。	1	2	3	4	5
⑲勉強内容が将来役に立ちそうだから。	1	2	3	4	5
⑳考えることが好きだから。	1	2	3	4	5
㉑教員がはりきっているから。	1	2	3	4	5
㉒友達に賢いと思われたいから。	1	2	3	4	5
㉓広い意味で学力を高めることだから。	1	2	3	4	5
㉔知識が増えることが楽しいから。	1	2	3	4	5
㉕学力が落ちると親が怒るから。	1	2	3	4	5
㉖勉強ができないことでみんなに嫌われたくないから。	1	2	3	4	5
㉗理解したい大切な内容だから。	1	2	3	4	5
㉘わからなかったことがわかるようになって自信がつくから。	1	2	3	4	5

対象とした調査より」の研究で使用した質問紙を使用する³⁾。表1「学習動機づけに関する質問紙」として示す。また、職業的アイデンティティに関する質問紙は、大橋ゆかりが、「臨床実習教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果の研究」で使用した質問紙を使用する¹³⁾。表2「職業的アイデンティティに関する質問紙」として示す。3年生に行う入学から調査時点までの学習動機づけの変化を示す調査表を、表3「学習に対する意欲の高さの変化（3年生を対象）」として示す。学習動機づけの質問紙の下位尺度と職業的アイデンティティの質問紙の因子について、以下に説明する。

学習動機づけに関する質問紙の下位尺度は、以下の四つに分類される。学習動機づけに関する質

問紙の下位尺度について表4に示す。下位尺度を具体的に示すと、外的調整（外的な力によって学習者の行動が生起する、他者からの強制によるなど）、取り入的調整（直接的な外的な力がない場合でも行動が生ずる、仕方なく、消極的な理由によるなど）、同一化的調整（自分の価値として同一化する、勉強することが何らかの手段であったとしても自分にとって大切であるという意識によるなど）、内発的動機づけ（学習する事自体を目的とする、学習内容に興味や楽しさを感じる、自発的にとりくむなど）の四つである。

職業的アイデンティティに関する質問紙の各質問項目は、以下の四つの因子に分類される。職業的アイデンティティに関する質問紙の各因子について表5に示す。因子を具体的に示すと、第1因

表2 職業的アイデンティティに関する質問紙

職業的アイデンティティに関する質問紙								
	あなたの該当する項目に○をつけてください。	男	女					
		1年生	2年生	3年生				
質問 次の各質問項目について、現在の自分に当てはまるところの数字に○をつけてください。 (判定基準) 1:全くあてはまらない 2:あてはまらない 3:あまりあてはまらない 4:どちらとも言えない 5:少しあてはまる 6:あてはまる 7:非常にあてはまる								
1	私は理学療法士になることが自分らしい生き方だと思う	1	2	3	4	5	6	7
2	私は理学療法士を生涯続けようと思っている	1	2	3	4	5	6	7
3	私は理学療法あり方について自分なりの考えを持っている	1	2	3	4	5	6	7
4	私は理学療法士以外の仕事は考えられない	1	2	3	4	5	6	7
5	私は理学療法士を選択したことはよかったと思う	1	2	3	4	5	6	7
6	私は理学療法士として理学療法の世界の発展に貢献していきたい	1	2	3	4	5	6	7
7	私は理学療法士として社会に貢献していきたい	1	2	3	4	5	6	7
8	私は理学療法士として患者の願いに応えたいと思っている	1	2	3	4	5	6	7
9	自分がどんな理学療法士になりたいかはっきりしている	1	2	3	4	5	6	7
10	私は理学療法士として医療の発展に貢献していきたい	1	2	3	4	5	6	7
11	自分が理学療法をしたいかはっきりしている	1	2	3	4	5	6	7
12	私は理学療法士として、これまでも、これからも、多くの人に必要とされていると思う	1	2	3	4	5	6	7
13	私は理学療法士を志す学生であると他人に誇りを持って言うことができる	1	2	3	4	5	6	7
14	私は理学療法士として患者に貢献していきたい	1	2	3	4	5	6	7
15	私は理学療法士として、医療チームの一員として今後ますます必要とされると思う	1	2	3	4	5	6	7
16	私は自分らしい理学療法をしていくことができると思う	1	2	3	4	5	6	7
17	私は理学療法士として患者に必要とされていると思う	1	2	3	4	5	6	7
18	将来、自分らしい理学療法ができるようになると思う	1	2	3	4	5	6	7
19	私は理学療法士として背景に独自の学問体系を持っている	1	2	3	4	5	6	7
20	私は理学療法士として医療の世界で不可欠な存在であると思っている	1	2	3	4	5	6	7

子（理学療法士を選択した自信に関する質問）、第2因子（自分の理学療法士観の確立に関する質問）、第3因子（理学療法士として、必要とされることへの自負に関する質問）、第4因子（社会貢献への志向に関する質問）の4つである。

6. 調査結果

調査は、平成30年7月第3週から第4週にかけて実施した。本研究に同意し調査に協力した学生のうち有効な回答を得られることができた学生数は、1年生82名（有効回答率95.3%）2年生67名（有効回答率87%）3年生51名（有効回答率77.2%）計200名であった。

3年生に対して実施した、入学から現在までの学習に対する意欲の変化についての調査における各時期の学習に対する意欲の高さの平均をグラフに表したものが図1である。縦軸は、意欲の高さを示している。独立変数を職業的アイデンティティ合計点数とし、従属変数を学習動機づけ合計点数として、単回帰分析を行った。全学生の職業的アイデンティティ合計と学習動機づけ合計の散布図を図2に示した通りで $r = 0.462$ であった。1年生の職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ合計点数の散布図は図3に示した通りで $r = 0.425$ であった。2年生の職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ合計点数の散布図は図4で示した通りで $r = 0.562$ であった。3年生の職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ合計点数の散布図は図5で示した通りで $r = 0.224$ であった。

全学生および各学年の職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ下位尺度の点数との相関係数を表6に示した。最も高い相関を示したのは、2年生の職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ下位尺度の同一的調整であった（ $r = 0.695$ ）。職業的アイデンティティに関する質問紙の各因子と学習動機づけに関する質問紙の各下位尺度との相関を調べた結果、最も高い相関を示したのは、2年生の職業的アイデンティティに関する質問紙の第4因子（社会貢献への志向）と学習

動機づけ質問紙の下位尺度の同一的調整であった。（ $r = 0.668$ ）

次に学習動機づけ合計が平均以上の学生を抽出し、学習動機づけ合計点数と職業的アイデンティティ合計点数との相関を調べた。独立変数を学習動機づけ合計とし従属変数を職業的アイデンティティ合計として単回帰分析を行った。その結果、それぞれの相関係数は低い値を示し、相関はほぼなかった。

7. 結果の考察

まず、3年生に実施した入学時から調査時点（現在）までの学習に対する意欲の変化を折れ線グラフで表す調査の結果について考察する。学習の意欲は、入学後から2年生の評価実習前まで多少の変動があるものの学年が高くなるにつれ高まる傾向にある事を示している。評価実習や臨床実習のような長期実習後は学習の意欲が高まることが分かった。2年生の冬季休暇後行われる初めての長期実習である評価実習終了後は2ポイント、3年生の1回目の臨床実習終了後は1ポイント高まっている。同じ長期実習でも初めての長期実習の方が、学生への何らかの影響が大きいと言えよう。

次に、職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ合計点数との関連性について考察する。図2に示す通り、全学生の職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ合計点数との相関は $r = 0.462$ で弱い相関が認められた。この事から、職業的アイデンティティの形成度合いが高いと学習動機づけが高くなることが認められた。学年ごとの職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ合計点数との相関について考察した結果、1年生では $r = 0.425$ で弱い相関が認められ、2年生では $r = 0.562$ で、相関が認められた。これらの事から、1年生と2年生においては、職業的アイデンティティの形成度合いが高いと学習動機づけが高くなる事が認められた。3年生においては、 $r = 0.2241$ で弱い相関を認めた。この事から、3年生においては職業的アイデンティティの形成度

3年生学習に対する意欲の変化（平均値）

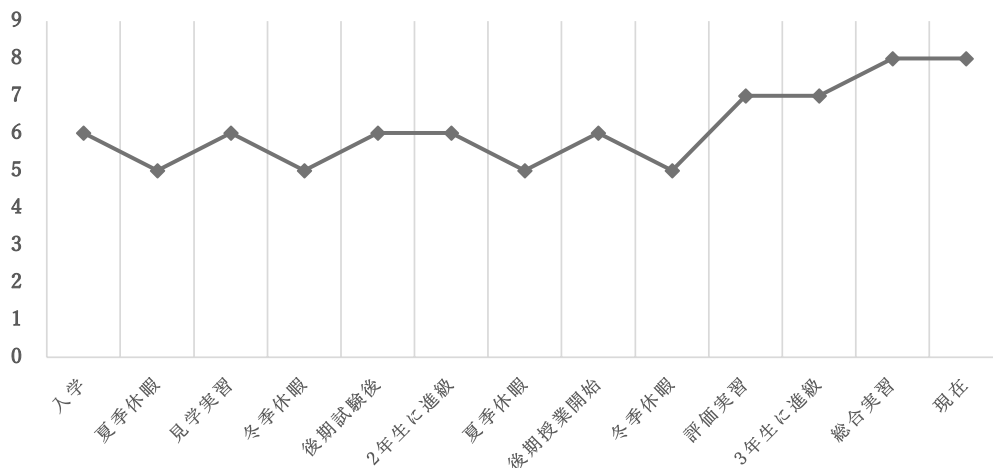


図1 3年生における学習に対する意欲の変化（平均値） 縦軸は、意欲の高さを示す

職業的アイデンティティ合計と 学習動機づけ合計の散布図(全学生)

$r=0.462$

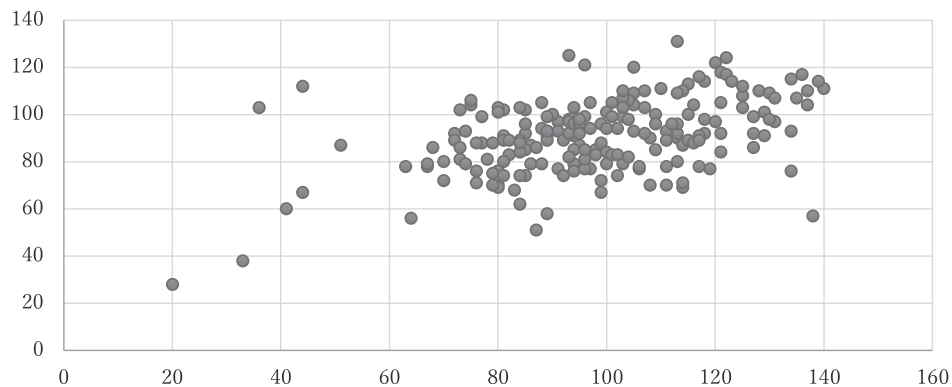


図2 職業的アイデンティティ合計と学習動機づけ合計の散布図（全学生）
横軸：職業的アイデンティティ合計点数 縦軸：学習動機づけ合計点数

職業的アイデンティティ合計と 学習動機づけ合計との散布図（1年生）

$r=0.425$

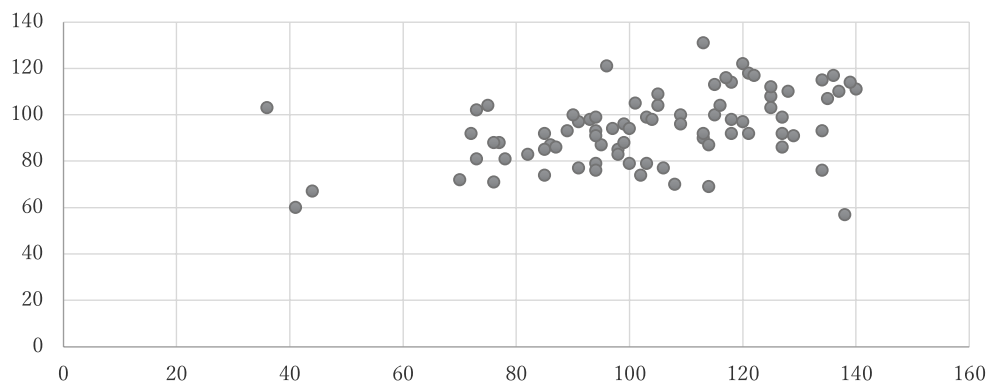


図3 職業的アイデンティティ合計と学習動機づけ合計の散布図（1年生）
横軸：職業的アイデンティティ合計点数 縦軸：学習動機づけ合計点数

職業的アイデンティティ合計と 学習動機づけ合計との散布図（2年生）

$r=0.562$

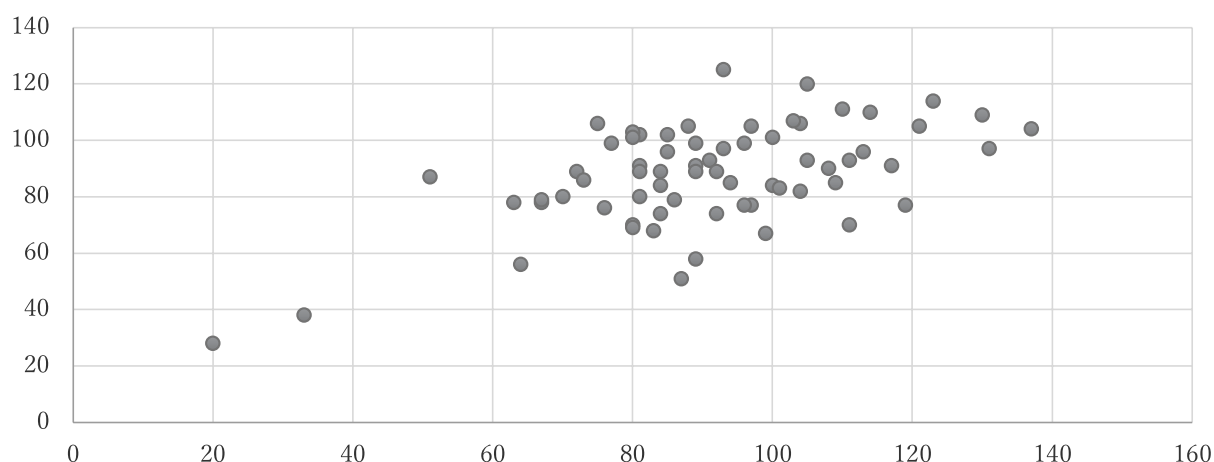


図4 職業的アイデンティティ合計と学習動機づけ合計の散布図（2年生）
横軸：職業的アイデンティティ合計点数 縦軸：学習動機づけ合計点数

職業的アイデンティティ合計と 学習動機づけ合計の散布図（3年生）

$r=0.224$

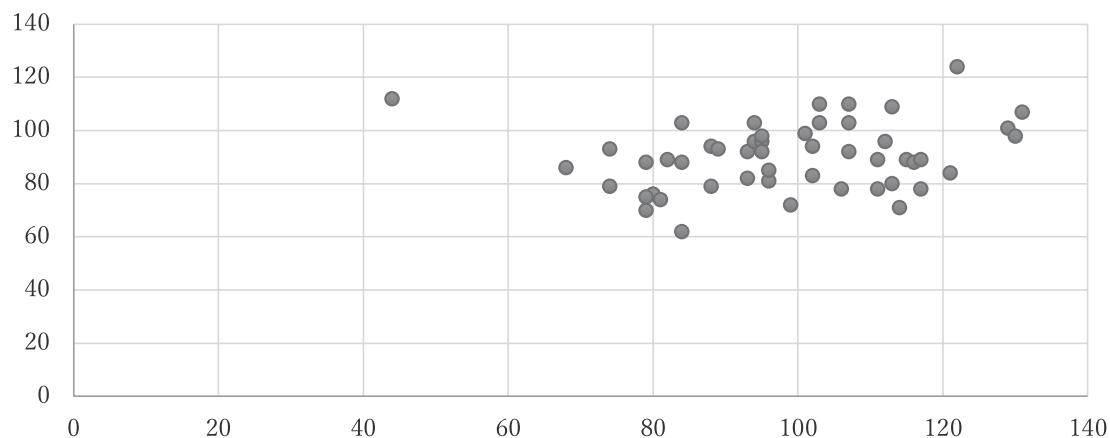


図5 職業的アイデンティティ合計と学習動機づけ合計の散布図（3年生）
横軸：職業的アイデンティティ合計点数 縦軸：学習動機づけ合計点数

表6 全学生および学年ごとの職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけ下位尺度点数との相関係数 表の数値は、Pearsonの積率相関係数を示す

全学生・学年ごとの職業的アイデンティティ合計と学習動機づけ下位尺度との相関係数				
学習動機づけ下位尺度	全学生	1年生	2年生	3年生
外的調整	0.030	-0.005	0.330	-0.224
取り入れの調整	0.237	0.191	0.330	0.039
同一化的調整	0.576	0.484	0.695	0.479
内発的動機づけ	0.555	0.549	0.628	0.371

合いが高くても学習動機づけは高くなりにくい事が認められた。

次に、職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけに関する質問紙の下位尺度との相関について考察する。表6に示している通り、全学生、1年生、2年生、3年生すべてにおいて、職業的アイデンティティ合計点数と学習動機づけに関する質問紙の下位尺度の「同一化的調整」や「内発的動機づけ」に弱い相関がある事がわかった。以上の事から、職業的アイデンティティの形成度合いが高いと学習動機づけ下位尺度の同一化的調整や内発的動機づけが高くなる事が認められた。

次に、職業的アイデンティティの各因子と学習動機づけ下位尺度との関連性について考察する。全学生においては、職業的アイデンティティのすべての因子と学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」と「内発的動機づけ」との相関が高かった。この事から、職業的アイデンティティの各因子の形成度合いが高いと学習動機づけの下位尺度の同一化的調整と内発的動機づけが高まりやすい事が認められた。1年生においては、職業的アイデンティティの因子の中で特に第4因子である「社会貢献への志向」と学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」と「内発的動機づけ」との相関が最も高かった（同一化的調整 $r=0.5575$ 、内発的動機づけ $r=0.5335$ ）。2年生においては、職業的アイデンティティの各因子すべてにおいて、学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」と「内発的動機づけ」との相関が他の学年に比較して高かった。特に、職業的アイデンティティの第4因子「社会貢献への志向」と学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」との相関が最も高かった（ $r=0.6681$ ）。以上の事から、1年生、2年生においては、職業的アイデンティティの第4因子である「社会貢献への志向」の形成度合いが高まると、学習動機づけの同一化的調整と内発的動機づけが高まることが認められた。3年生においては、職業的アイデンティティの各因子と学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」と「内発的動機づけ」との相関は他の学年と比較して低いが、

第1因子である「理学療法士選択の自信」と「同一化的調整」との相関は、高い相関を示した（ $r=0.5087$ ）。この事から、3年生においては、職業的アイデンティティの第1因子である「理学療法士選択の自信」の形成度合いが高まると学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」が高まることが認められた。

次に、学習動機づけ合計点数が平均以上の学生において、独立変数を学習動機づけ合計点数とし従属変数を職業的アイデンティティ合計点数として単回帰分析を行った結果を考察する。学習動機づけ合計点数と職業的アイデンティティ合計点数との相関係数は低い値を示し、相関はほぼなかった。この事から、学習動機づけが高くても、職業的アイデンティティの形成度合いは、必ずしも高くない事が認められた。学習動機づけが高い学生は、理学療法士に対する職業的アイデンティティの形成の度合いに係わらず、大学における学習そのものに興味を示し、能動的に学習を行っているのではないかと考えられるのである。

以上の考察から、次の事が明らかになった。1年生や2年生においては、職業的アイデンティティの第4因子「社会的貢献への志向」が高まれば、学習動機づけ下位尺度の「同一化的調整」や「内発的動機づけ」が高まり、結果的に学習動機づけが高まることにつながる事がわかった。3年生においては、職業的アイデンティティの第1因子「理学療法士選択の自信」が高まれば、学習動機づけの「同一化的調整」が高まり、結果的に学習動機づけが高まることがわかった。また、学習動機づけが高くても、職業的アイデンティティの形成度合いは、必ずしも高くない事が認められた。

以上により、本研究の仮説である「職業的アイデンティティの形成の度合いが低い学生は学習動機づけが低く、職業的アイデンティティの形成の度合いが高い学生は学習動機づけが高い」という仮説と、「学習動機づけが高い学生は必ずしも職業的アイデンティティの形成の度合いが高いとは言えない」という仮説は、正しいことが検証され

た。

本研究の結果から、理学療法士養成短期大学において、どのような具体的な支援方法が考えられるであろうか。考えられる具体的な例を以下に示す。

学生が、理学療法の対象者が理学療法を受け、身体機能が改善されたあと、その対象者の方が職場復帰したとか元の生活に戻ったというような事について知ることは、理学療法士は個人レベルで身体機能の回復に対する治療を行うのであるが、間接的に社会貢献しているという理解に繋がるのではないかと考えられる。つまり、対象者の方が理学療法を受けたあと、生活が改善したとか、仕事復帰できたというような事を学生に示すことは、職業的アイデンティティの第4因子の「社会貢献への志向」を高める事ができると考えられるのである。

高校生や中学生の選手やプロやアマチュアの選手に対して理学療法士が関わった事で良い成績を得ることができれば、これも社会貢献の一つという事になる。つまり、スポーツの世界における具体的な理学療法士の活躍を知ることができれば、職業的アイデンティティの第4因子の「社会貢献への志向」を高める事ができるのではないかと考えられる。

高齢者の介護予防事業は、介護を必要としない高齢者に対して心身の機能を維持しようという目的で様々な事業が行われている。介護予防事業で理学療法士が活躍し効果を出しているという事は、まさに社会に貢献しているという事である。介護予防事業での理学療法士の活動とその効果を学生に紹介することは、職業的アイデンティティの第4因子の「社会貢献への志向」を高める事に繋がる事になる。

障害の重い方は在宅生活を余儀なくされている方が多い。そのような方々に理学療法士がかかわる事で社会参加や在宅生活が改善される事例は多い。そのような事例を学生に紹介することは、学生の「社会貢献への志向」が高まる事に繋がるのではないかと考えられる。福祉機器や車椅子の開

発と処方、住宅改修等は、個人の生活改善ではあるが、障害のある方の社会参加を促進することにも繋がる。これも、理学療法士の社会貢献であると考えることができ、このような理学療法士の活動を示すことも学生の「社会貢献への志向」を高める事に繋がると考えられる。これまで述べた事例の提示は、学生の「社会への貢献」を促すこととして考えた支援方法であるが、3年生における学習動機づけとの相関が高かった「理学療法士選択の自信」を高める事にも繋がるのではないかと考えられる。

3年生の「理学療法士選択の自信」が高まる要因の一つに、臨床実習における経験があるのではないかと考えられる。大橋ゆかりは、「職業的アイデンティティには職業的モデルとの出会いの有無が影響を与えており、実習中に職業的モデルと出会った学生は職業的アイデンティティスコアが高かった」と、報告している¹³⁾。その反面、臨床実習は学生が直接対象者に対して評価を行い治療の体験をさせていただくという形態をとっているため、「学生によっては自分の力量を客観的に感じ、職業的アイデンティティが低下してしまい職業的アイデンティティの危機に遭遇しやすいことを示しているので、教員や実習指導者は注意すべきである」とも、報告している。いづれにしても、臨床実習が学生の職業的アイデンティティの形成に影響をもたらしている事に間違いのないと言えよう。

8. 本研究の課題と展望

本研究は、理学療法士養成短期大学在学中の全学生を対象に行った横断的研究である。本研究の対象となった学生の職業的アイデンティティがどのように変化するのか経過を追い、学習動機づけとの関連性についての縦断的研究を行う必要がある。また、本研究で明らかになった調査結果が、別の年度に在籍していた学生に対する調査結果と同様か否かについて検証のため、別の年度に在籍している学生を対象に本研究と同様の横断的研究を行う必要がある。

理学療法士養成大学および短期大学における教育はいかにあるべきであろうか。理学療法士という職業は、対人援助職であると言われている。理学療法士養成大学の教員は、理学療法士の国家資格を有しており、学生という対象者に対して、教育というサービスを提供している。対人援助という視点において、臨床現場も大学も同じではないかと考えている。顧客満足度という視点で考えれば、理学療法士を目指して入学した学生に、理学療法士の仕事への興味を持たせる事、理学療法士の可能性を伝える事で学生の満足度は高まるのではないかと考えている。このことこそ我々教員が行うべきことなのではないかと考えている。その方法の一つとして、本研究の調査結果から明らかになった理学療法士の社会貢献について、また、教員自身が理学療法士という職業を選択してよかったという事実を学生に伝えることが考えられるのである。

エドワード・L・デシは、その著書の中で「親、先生などは、子どもや生徒の動機づけと責任感を促進するという仕事を受け持っている」と述べている¹⁴⁾。大学の教員はまさにその通りで、知識や技術を伝えるだけでは片手落ちであり、学びたいという学生の動機づけを促さなければならないのである。エドワード・L・デシは、同じ著書において、「他者をどのように動機づけるかではなく、どのようにすれば他者が自ら動機づける条件を生み出せるかである」とも、述べている。学生に対して、学生が能動的に学習をしたくなるような支援、つまり、学生が自分自身の内的動機づけを高める事ができるような支援を、我々教員が行うことこそ非常に大切な事なのである。学生達が、卒業までに迷いなく、理学療法士を職業として選択して良かったと実感できることを心から願う。本研究の結果が、そこに行きつくまでの教育課程の一助になり得ることができれば、幸いである。COI 開示：本研究において、開示すべき利益相反関係にある企業・組織・団体はありません。

引用文献

1) 稲垣恭子：教育文化の社会学。放送大学大学

院教材,放送大学教育振会, 2017, pp.106-119, 194-206.

- 2) ベネッセ教育総合研究所 高大接続に関する調査. 2014, 9, 17 <https://resemom.jp/article/2014/09/17/20450.html>
- 3) 成田亜希：進路自己決定度や進学動機が学習動機づけと学業成績に与える影響—理学療法士養成課程学生を対象とした調査より. 白鳳女子短期大学紀要, 2014; 9: 29-38.
- 4) 落合幸子：医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連. 医学教育, 2006; 37: 141-149.
- 5) 尾崎仁美,松島るみ：大学生の授業意欲の変化とその要因. 京都ノートルダム女子大学心理学部・大学院心理学研究科研究誌「プシケ」, 2006; 5: 63-74
- 6) 櫻井茂男：自律的な学習意欲の心理学. 誠信書房, 2017, pp.1-15.
- 7) 市川伸一：PHP 新書171 学ぶ意欲の心理学. PHP 研究所, 2001, pp.37-53.
- 8) J.M.ケラー、鈴木克明監訳：学習意欲をデザインする. 北大路書房, 2010, pp.10-65.
- 9) 半澤礼之：大学生の進学動機と学業に対するリアリティショック. 北海道教育大学紀要（教育科学編）, 2014; 64: 233-240.
- 10) E・H・エリクソン、岩瀬庸理訳：アイデンティティ青年と危機. 金沢文庫, 1982, pp.166-173.
- 11) 藤井恭子：医療系学生における職業的アイデンティティの分析. 茨城県立医療大学紀要, 2002; 7: 131-142.
- 12) 藤井恭子：医療系学生における職業的モデルが持つ特性. 茨城県立医療大学紀要, 2004; 9: 103-109.
- 13) 大橋ゆかり：臨床教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果. 理学療法学, 2006; 33: 311-317.
- 14) エドワード・L・デシ、櫻井茂男監訳：人を伸ばす力 内発と自律のすすめ. 新曜社, 2017, pp.10-17.